KSKS ちいろばだより 251

二〇〇〇年十二月十二日　第三種郵便物承認　毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行

平和をつくり出す

ちいろば会理事長 大澤 星一

2022年度ももうすぐ終わろうとしています。この年度も皆さまに支えられて過ごすことが出来たことを心から感謝いたします。

いつも穏やかにイキイキと、ということもだんだん難しい時代になってきたのかなと感じ始めています。

僕は懐古主義ではありませんし、昔を全肯定するつもりもまったくありません。しかし、いろいろな制度やものの見方、受け止め方、考え方が溢れるようになった今の時代を思うと、かえって生きにくさを感じる人も多くなったのではないか、とも思います。その一方で、忘れてはならないこと、守らなければならないことが少しずつ削られていって、いつの間にかがんじがらめになり、こんなはずじゃなかった、と後悔するかもしれないとの不安もあります。

先日、京都の市立高校が昨年10月に修学旅行で沖縄を訪れ、その際米軍基地内の高校で、エアガンを用いた射撃体験を行っていたとの報道がありました。この修学旅行には生徒たちがさまざまな問題意識をもつために計画するフィールドワークがあり、県立平和記念公園やひめゆり平和記念資料館を訪れ、その後米軍基地内にある同世代の高校生と交流するために基地を訪問していたということです。沖縄の新聞社が京都市教育委員会に確認したところ、「過去の戦争や基地の問題で多角的な考え方を身に付けるため、同世代が何を学び考えているか感じることは、射撃訓練を含めて意義があった」と評価しているとありました。また、この基地内高校との交流プログラムは米軍基地の広報担当に任せていたということでした。

「射撃訓練も含めて多角的に意義があった」ということは、戦争によって人を殺す行為も認めるという理解を前提にしています。そもそも平和を考えるために射撃訓練を体験させるということ自体が大きな矛盾であり、あってはならないことでしょう。

私たちの国は、戦争がもたらす多くの犠牲とその痛みを経験しました。その痛みを二度と繰り返さないと誓ったはずです。それを覆すような今回の出来事と教育委員会の言い分を聞いて、とても恐ろしくなりました。

いったい私たちはどこへ向かっているのでしょうか。それは戦争ではなく平和です。少しずつ逆の方へ逆の方へ、戦争へ戦争へと引き寄せられていっているのかもしれません。恐ろしいことです。だから、皆でその平和のために祈って考えて、平和をつくり出していきましょう。

一緒に過ごすことが当たり前に・・・

ちいろば園主任　奥田陽子

年が明けた頃、香芝北中学校の先生より「障害者理解をテーマにした人権学習」での講演依頼のお話を頂きました。その先生は2年前別の中学校でも私たちを呼んで下さり、「好評だったから新しく赴任した学校でも是非お話してもらいたい」とのこと。とても嬉しく思い、依頼をお受けしました。

2月24日講演当日、ちいろば園利用者の辰巳さん、西田さんと三人で伺いました。利用者のお二人からちいろば園の活動紹介をしてもらったあと、私からは、障害をもつ人たちと一緒に出かけた際に経験した、いくつかのエピソードをお話ししました。昨年ピープルファースト大会で訪れた北海道にて、JR の駅員から「車椅子の人が電車に乗るなら、発車の三十分前に駅に来て下さい。」と当たり前のように言われたこと、快速電車の車内で「トイレにいきたいから、札幌駅に着いたら多目的トイレのある隣の車両に乗り換えたいです。」と申し出たら、「車椅子ですよね？それならだめです。」と当然の如く断られたこと。神戸旅行では、広く設けられたスペースで行動班の数人一緒にイルカショーを観覧しようとしたところ、警備員から「車椅子（の人）だけおいといてください！」と何度も声をかけられ、車椅子の方と介助者や仲間が一緒に過ごすことを妨害されたこと等。中学生のみなさんはこれまでに「バリアフリー」について学んできたと聞いていたので、物理的な設備が整備される一方で、まだまだ悔しい想いや腹が立つ想いをしていることを伝えました。

ムードメーカーの辰巳さんは自身のことを楽しい口調で話し、中学生のみなさんにもマイクを渡して発言してもらうなどして、和やかな雰囲気を作ってくれました。西田さんは大勢の前でも物怖じせず、大きな声で日々の暮らしや作業活動でのがんばりを発表。中学1年生186人もいる中での講演会で、私は緊張マックスでしたが、お二人の堂々とした姿勢に「さすが！」と思い、とても心強かったです。講演会が終わったあと先生方が、「生徒たちの中にあるイメージがガラっと変わったと思う。」「自分らと何も変わらないってことがよくわかったと思う。」と言って下さいました。

今回のように、学校教育において障害をもつ当事者を交えて障害者理解の学習を行なうことはとても意義深いことだと感じます。しかしそれは、障害をもつ人を分けることが当たり前になりつつあるからであり、もっと小さい頃から同じ場で学び、一緒に過ごすことによって嬉しいことや悔しいことも一緒に経験できるだろうと思います。

昨年11月に奈良で開催した『共育を実現する会』で尾上浩二さん（DPI日本会議　副議長）が「『（障害者を）分離した上で手厚く』といった対応を捉え直し、『分離せず合理的配慮と必要な支援』へと転換していくことが必要だ」と仰いました。今回こうした講演の機会をいただいたことで、改めて尾上さんのことばの意味を実感しました。そんなある日、『障がいのある方専用の宿泊プラン登場』というニュースの見出しを目にしました。設定された宿泊日は障害者を含むグループのみ、食事提供や備品の配慮はもちろん、周り（障害のない人たち）の目を気にせず過ごせる、というもの。思わず、「なんでやねん！」と…。

障害をもつ人たちがどんどん分けられることが当たり前にならず、一緒に過ごすことが当たり前になるよう転換していかないといけませんね。

「言葉の奥の思いを知るために」

グループホーム職員　忠澤美緒

私がグループホーム職員としてちいろば園に入職したのは昨年の 7月で、もうすぐ 1年 8 ヶ月が経とうとしています。介護の仕事は全くの未経験からのスタートでした。そのため入職当初は私からどのように話しかけていけば良いのか、また利用者さんから話しかけられてもどのように答えれば良いのか分かりませんでした。今になって考えてみると、分からないままやきちんと理解ができていない状態のまま適当に答えたり、聞き流していたことはスムーズなコミュニケーションが取れていたとは言えず、利用者さんに対してとても失礼な対応だったと思います。

そんな思いから少しずつ利用者さんとのコミュニケーションが取れるようになった私にとって、利用者さんとのやり取りの大切さを改めて感じる出来事がありました。それは 2月14日にちいろば園で行われた権利擁護委員会でのある利用者さんのお母様のお話でした。「娘に昼食後すぐにお風呂に入りたいと言われた時があり、その時お腹は大丈夫なの？来客があるから～のテレビが終わってからにする？と話し合ったら、娘は納得して入浴してくれたんです。」と言う話を聞いて、私ならまだお昼なのにと否定的な対応をしてしまうかもしれないと思いました。納得してもらい行動するという、長い時間を一緒に過ごしてきた家族だからこその考えや対応に感銘を受けました。堀先生も「利用者さんには拒否したり抗議したりする権利がある。どうして利用者さんがそう思うのかを私たちは考えたり、利用者さんとやりとりすることがとても大切だ。」と仰っていました。もちろんいつもお互いが納得できるとは限りませんが、このような一つ一つのやり取りがとても大切で利用者さんとのスムーズなコミュニケーションに繋がるのではないかと感じました。

グループホームの職員として働いている中で利用者さんが何度も同じことを言ったり、何かに強くこだわったりする時は正直しんどいと思う時もあります。しかしその言葉や行動だけにとらわれることなく、その言葉の奥の思いを知るために利用者さんと日々コミュニケーションを積極的に取ることを心がけ、私自身もスキルの向上に努めていきたいと思います。

今までにない普段の自分への気づき

ちいろば園職員　窪田直子

私が今までに経験したことのない職種に就かせていただき、初めてだらけの毎日を送ってきて気付けた大切な事のお話をさせて頂きます。

【人に伝える時に、曖昧な言葉は使わない。】

普段何気なくしている会話を思い浮かべると、略した言葉や曖昧な表現だらけだなと思いました。伝えようではなく、伝わってると思い込んでいたなと。

利用者さんとの日々のやり取りでも、このような事がありました。

O さんに何かを探す時に「一緒に探してください、ついて来てください」と言われた時、手を離せなかったので「ちょっと待ってください」と私は言いました。O さんはすぐにまた同じ言葉を繰り返しました。

曖昧な表現だったなと気づき、「ちょっと」の部分を「○○が終わったらでもいいですか？」に変えてみると「○○が終わってからですね、いいですよ」と O さんが待っていてくれました。

少し自分の中で、今の言い方か！となりました。

しかしこれまでずっと使ってきた言葉使いを変えるのは安易な事ではありません。

ぱっと出てしまって言い直したり、まだまだ気付かないうちに口にしているとは思いますが、その都度考えたり気付ける発見が楽しくもあります。

ちなみに家でもそうです。

毎日毎日何度も同じことを注意したり、怒ったりするのは、私が悪かったんだと気付き、聞いてみました。【子供の性格もあるでしょうが、、、】

「自分の用意早くして」「これちゃんとしてよ」とかママに言われていつも「わかった」っていうのは、何を分かって返事してるの？と。

出てきた答えが「ママの言ってることをきくとか、ちゃんとするとか」と曖昧で具体的には分からないものでした。

今忙しいからとか、伝わるだろう、ではなくて具体的で相手に伝わりやすく言葉を発信していかないといけないことを学べました。

一人の大人として、母としてもまだまだ成長段階にいます。

そんな私にとって、利用者さんは色々なことを教えてくれるちいろば園の大先輩であり色々な事を気付かせてくれて私を成長させてくれる存在であると思っています。

これからも沢山の事を経験して失敗も沢山あるとは思いますが、

その分成長していけたらいいなと思っております

こんな私ですが、これからもよろしくお願いします。

グループホームの現状と課題

グループホーム職員　増田広正

『障害者グループホームの現状・課題』として厚生労働省は、ＧＨ利用者が 2019年11月には入所施設利用者数を上回り、2021年9月には 15万人に増加。障害者の重度化･高齢化対応とさらなる地域移行推進のためＧＨの重度障害者受入の整備が必要。ＧＨ利用者の中で「一人暮らしやパートナー等との生活」希望が多い（4割）が、そのための「自立生活援助」サービスや「地域生活支援拠点等の整備」は広がっていない。障害福祉サービスの実績や経験のない事業者（営利企業等）参入が増え、障害特性や障害程度を踏えた支援が適切に提供できない。支援の質の低下が懸念される、としている。

その中で、「通過型」ＧＨの導入が図られた。東京都は既に設置している。「3年で追い出される」、「訓練が強要される」等といった不安が広がるが、去年10月、『障害者総合支援法』の「改正」でＧＨの定義が変えられた。検討してきた社会保障審議会障害部会の『支援法施行後3年の見直しについて』で「継続的な支援を希望する者については、これまで通りのＧＨを利用できる」と断っているが、警戒が必要である。

コロニー政策、隔離収容からの脱却、地域でのＧＨ生活、そして一人暮らし、パートナーとの生活という流れの意義は押さえておかねばならないが、そこに「訓練」や「選択」の強要や排除があってはならない。福祉予算を削るために地域移行、「一人暮らし」や「自立」を強要しかねない。２０18年からの「自立生活援助事業」「支援拠点整備」も機能していないということだが、「通過型」に対しての不安は解消できない。ちいろば会の障害者たちも自ら高齢化し、親御さんも亡くなったり老障介護の限界でＧＨのニーズが高まっているが、職員集めもスムーズには進まない。「介護職」の賃金も安いが、障害者に対する理解もまだまだ。２０１９年１２月の新聞報道では、ＧＨ等建設の反対運動が過去５年間で全国６８件起きた。『手をつなぐ育成会連合会』のアンケート調査では、２０１１年からの１０年間で反対を受けた９５件の障害者施設の内７１件がＧＨだったと。私は１年半前から、にぬふぁ星で泊まり勤務しているが、まだまだきちんと支援できず悪戦苦闘している。しかし、逆にこうも思う。地域の「普通」の人がもっと利用者と関わり、溶け合う社会にしなければ。利用者も地域にもっともっと出て、自分の個性や特性を発揮していかねば。ただ自分の職員としての「専門性」「技」を磨くだけではだめだ、と。営利目的の企業参入にも警戒が必要である。障害者が排除され、生活不安を強いられるのは何故か、その根本を問い直していかねばならない。

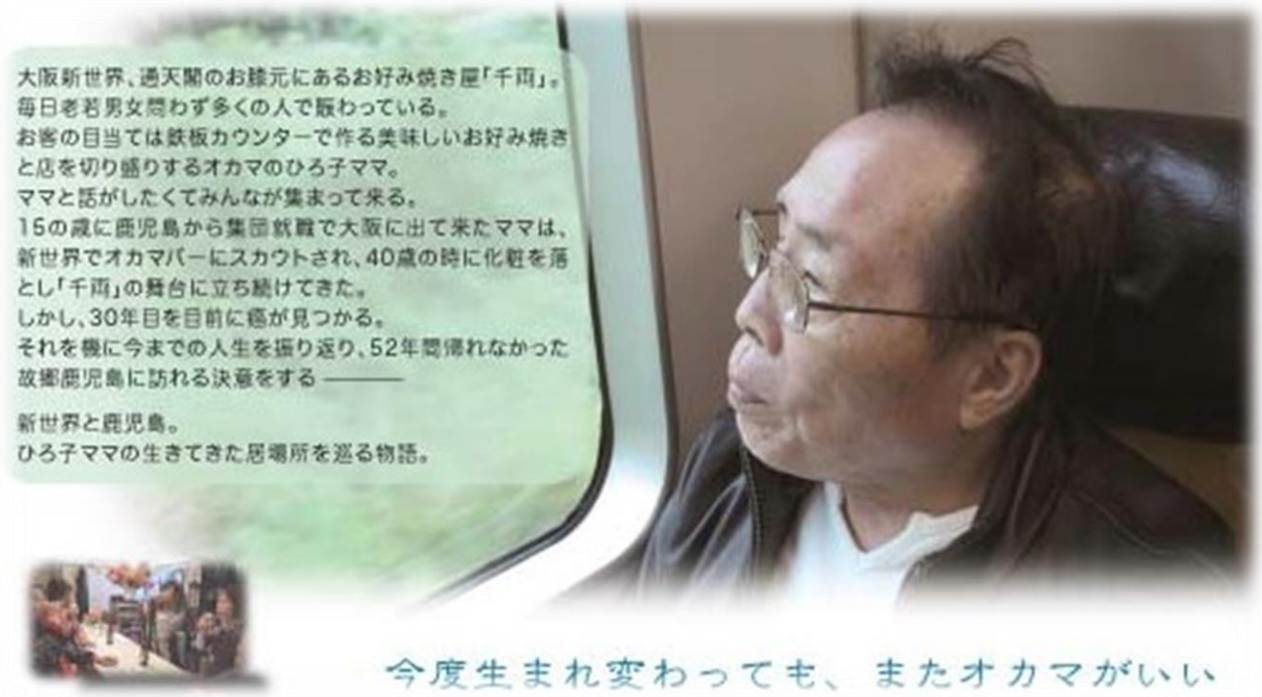
―ぼくも わたしも みんなが主役―

質問①　名前と年齢は？
質問②　家族にまつわるエピソードは？
質問③　学校、就労時代のエピソードは？
質問④　最近気になっていること、興味があることは？

① 黒川正通です。50歳です。
② お母さんと、弟と一緒に暮らしています。
２２年前にお父さんが病気で亡くなりました。
弟が図書館で働いているので、よく本を借りてきてくれます。
僕も時々、お母さんと一緒に本を借りに行きます。
③ 斑鳩西小学校、西ノ京養護学校、二階堂養護学校に通いました。
小学校では、毎日いつも友達と一緒でした。できない事もみんなが手伝ってくれて、一緒に過ごせて楽しかったです。
家にもよく、遊びに来てくれました。今でも友達に会うと「まんちゃん」と当時のニックネームで、声をかけてくれます。
④ 弟が土曜日、日曜日に仕事の為、休みが合わないけど、コロナが収束して、弟の休みがとれたら、母と弟、僕の３人で、ゆっくりと車で旅行に行きたいです。

① 松長　玲　50歳です。
② 実家で父母と 3人で暮らしていました。
将来のことを考えて 4年前から、
グループホーム『にぬふぁ星』の隣にあるマンションで一人暮らしを始めました。ヘルパーさんと買い物や掃除、洗濯を頑張っています。お父さんにプロ野球の試合を観に連れて行ってもらったことを覚えています。大阪球場や、藤井寺球場に行き、南海ホークスや近鉄バッファローズ、阪急ブレーブスを応援していました。
③ 一番の思い出は、小学校の修学旅行です。新幹線に乗っていきました。
原爆ドームを見ました。お土産にもみじまんじゅうを買いました。
家でみんなで食べました。おいしかったです。
高等養護学校卒業後、SM工業というところと、丸仁上染で 4年間働いてました。その後、大和高田市の青垣園に通所し、現在ちいろば園に通っています。
④ 気になっていることは、今年のプロ野球のことです。各チームのピッチャーやバッターのことが気になっています。微糖の缶コーヒーが大好きです。
ヘルパーさんと買い物に行く時は、毎回同じ自動販売機で買います。
（1度に 14本買ったこともあります）ヘルパーさんといろんなところに買い物に行きたいです。プロ野球も観に行きたいです。おいしいコーヒー飲みたいです。

―ちいろば会上映会（地域公益事業）のご案内―



映画上映

『わたしの居場所～新世界物語～』(2018年)

監督：武田倫和

あらすじ

大阪新世界、通天閣のお膝元にあるお好み焼き屋「千両」。毎日老若男女問わず多くの人で賑わっている。お客のお目当は鉄板カウンターで作るおいしいお好み焼きと店を切り盛りするオカマのひろ子ママ。ママと話がしたくてみんなが集まってくる。15歳で鹿児島から集団就職で大阪に出てきたママは新世界でオカマバーにスカウトされ、40歳の時に化粧を落とし「千両」の舞台にたち続けてきた。しかし30年目を目前に癌が見つかる。それを機に今までの人生を振り返り、52年間帰れなかった故郷、鹿児島を訪れる決意をする。新世界と鹿児島、ひろ子ママの生きてきた居場所を巡る物語。

入場無料

ちいろば園２階会議室

2023年6月10日（土）13:30～15:30

※　当日、王寺駅までの送迎を行います

送迎を希望される方は前日までにちいろば園までご連絡ください。

☆後援会費・ちいろばだより年間購読料（2022年12月1日～2023年1月31日）
ご協力ありがとうございました。

篠原範子、窪田義廣、吉田陽亮、岡田登志、中田ひとみ、草苑幼稚園、恵愛保育所
学校法人ひかりの子学園、馬見労祷教会、愛の園保育園めぐみ会、NGYEN THI UYEN UYEN

以上　敬称は略させていただきます

ブルーベリーのオーナー募集

２０２３年度も、ブルーベリーオーナーを募集します。ちいろば園で栽培している木から、１株選んでいただき、７月中旬～８月中旬に実の収穫ができます。思う存分『自然』と『ブルーベリー』を味わいたい方のご応募お待ちしています。

◎収穫場所：ちいろば園　ブルーベリー畑
◎料金：１株につき 3800円
◎申し込み期間：4月28日まで
◎申し込みは、お電話にて、【お名前、ご住所、ご連絡先】等をお知らせください。
（平日9：００～１７：３０）
※先着順で受け付けます。なお、申し込み期間中でも１０株に到達した時点で終了させていただきます。ご了承ください。

◎ご応募やお問い合わせ◎
電話／０７４５－７２－１９２３　ちいろば園（ブルーベリー担当）

KSKS　ちいろばだより

編集人／　ちいろば会後援会　　年６回　頒価　50 円
連絡先／　奈良県生駒郡三郷町勢野北５－６－１４
TEL：0745-72-1923 FAX：0745-72-1924
発行人／　関西障害者定期刊行物協会
大阪市天王寺区真田山町２－２　東興ビル４Ｆ

二〇〇〇年十二月十二日　第三種郵便物承認　毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行